

善を得たが有用な下肢機能を有するDにまで改善したのは外傷時Cであった1例のみである。慢性期の delayed CTM では、このDまで改善した1例を除き他の5例全例に外傷部を中心に数髄節上方までつづく髄内の cyst を認めた。特に arachnoiditis を合併した2例では早期より高度に髄内へのメトリザミドの流入がみられ、将来空洞が上方へと進展し、いわゆる外傷性脊髄空洞症の病態を呈する可能性が示唆された。

### 28) 初期に診断困難と思われた眼窩筋炎の1例

山本 潔・寺林 征 (富山県立中央病  
北沢 智二・新井田広仁 (院 脳神経外科)  
森 宏・杉山 義昭  
中川 正人 (同 眼科)

症例は61歳女性、左眼球突出、複視、左眼窩部痛にて発症。眼科的所見として、左眼球突出、全方向の左眼球運動制限を認めた。CT では、眼窩内下壁に接し眼球後方から先端部にかけて辺縁明瞭な高吸収域を示す占拠性病変を認めた。当初眼窩内腫瘍が疑われたが、本症例の発症が急激であり、加えてその後病状の進展を認めなかった為、眼窩偽腫瘍を疑い保存的に加療していたところ、後日再検した CT で腫瘍の縮小を認めた。CT 上、腫瘍は下直筋が肥大したものと思われ、眼窩偽腫瘍の一種である眼窩筋炎と考えた。CT により眼球突出の病態を把握できるようになり、その経時的変化の評価が診断、治療方針決定に役立つ場合があると思われる。

### 29) 内頸動脈閉塞症を呈した化膿性髄膜炎の 一小児例

高橋 祥・谷村 憲一 (三之町病院)  
北沢 智二・山崎 英俊 (脳神経外科)

化膿性髄膜炎後に内頸動脈の完全閉塞を呈する症例の報告は比較的稀であり、我々はこのような経過を示した小児例を経験した。患児は女児で、生後9ヶ月時発熱、意識障害が出現し、某小児科にて S, pneumoniae による化膿性髄膜炎の診断にて加療。第15病日に当科にて CT スキャンを施行し、両側内頸動脈領域に広汎な低吸収域、浮腫による正中偏位が認められ、第28病日の CT スキャンでは、両側内頸動脈領域は一部高吸収域を混じた低吸収域となっており、出血性脳梗塞と診断。その後施行した脳血管写では、左内頸動脈の完全閉塞像が認められ、化膿性髄膜炎後の血管炎による左内頸動脈閉塞、及び右内頸動脈閉塞後の再開通の像と考えられた。

### 30) Lymphocytic adenohypophysitis と 考えられた1例

池田 秀敏・奥平 欣伸 (市立酒田病院  
脳神経外科)

症例は、29歳、女性。妊娠9ヶ月初め頃より、嘔吐を伴う前頭部痛が出現した。第1子を出産後3日目より頭痛強度となり、視野障害も増強してきたため当科受診となる。入院時、PRL 値は正常で乳汁分泌は認めず、両耳側半盲の他に神経学的異常を認めなかった。CT scan では、鞍上部に発育し、均一に enhance される下垂体腫瘍を認めた。出産2ヶ月後頃より、CT 上で腫瘍の著明な縮少とともに、視野の改善が見られたため経過観察していたところ、出産3ヶ月には、下垂体腫瘍は消失した。出産1年後の内分泌検査では、下垂体機能低下を認めた。以上、Lymphocytic adenohypophysitis と酷似する臨床経過をとった下垂体腫瘍の natural history を報告した。

### 31) 脳腫瘍に脳膿瘍を合併した一例

高橋 敏夫・椿坂 英樹 (弘前大学脳神経  
森山 隆志 (外科)

症例は、36才、男性、喘息の治療中、発熱、頭痛、嘔吐をきたし、昭和60年4月、紹介された。初診時、全身るいそう、四肢拘縮、意識障害、尿崩症、項部硬直等あり。CT で、鞍上部に直径2.5cm の cystic mass あり。腰椎穿刺で、細胞数1530/3、蛋白590mg/dl と髄膜炎所見であった。抗生剤治療の後、同年7月、膿瘍摘出手術を行った。膿瘍は3個で、鞍上部の一個は易出血性、壁も厚く亜全摘にとどめた。組織学的には、頭蓋咽頭腫で、5000 R の放射線治療を追加し、同年12月末、退院した。なお感染経路は不明であった。

頭蓋咽頭腫への感染性疾患の合併は、文献上、ほとんどが、chemical meningitis で、true abscess の合併は非常に稀であった。

### 32) CT 定位脳手術法を用いた脳膿瘍の 治療について

鈴木 知毅・下道 正幸 (中村記念病院)  
佐々木雄彦・中村 順一 (脳神経外科)  
斉藤 佐・伊藤 直樹 (同 神経内科)  
末松 克美 (同 脳神経疾患研究所)

脳膿瘍の治療に於て今回我々は CT 定位脳手術法を用いた良好な結果を得たので報告した。

<対象・方法> 脳膿瘍5例。Enhance CT にて ring like enhance される病変の中心部を target point

とレシリコンカテーテルを刺入。カテーテルは留置し術後排膿腔内洗浄、及び抗生剤注入を行なった。

＜結果＞ 4例はCTにて病変が縮少し排膿を認めなくなった時点でカテーテル抜去し、その後抗生剤全身投与を行ない軽快。

＜結論＞ 脳膿瘍の治療に於てCT定位脳手術法を用いることの利点として、脳深部の小膿瘍・multilocularなもの・慢性期で壁の硬い膿瘍などでも正確に穿刺排膿することが可能である点、術後の神経脱落症状が少ない点、等が挙げられると考えた。

### 33) 悪性下垂体腺腫の1例

黒木 瑞雄・田中 隆一 (新潟大学脳研究所 脳神経外科)  
 武田 憲夫・横山 元晴 (同 脳神経外科)  
 関口賢太郎・河野 充夫 (同 脳神経外科)  
 新保 義勝・高橋 均 (同 脳神経外科)  
 生田 房弘 (同 脳神経外科)

遠隔転移をきたす謂ゆる悪性下垂体腺腫は極めて稀である。我々は、今回手術後、短期間に広汎な髄腔内播種をきたし、不幸の転帰をとった1例を経験したので報告する。症例は47才、女性。急速に進行する視力低下及び視野障害にて発症。手術にてトルコ鞍内から鞍上に伸展する腫瘍を摘出。組織診断は嫌色素性下垂体腺腫であり、核の大小不同が著明で、核分裂像も散見された。内分泌学的には non-functioning adenoma であった。退院後2ヶ月して、頭蓋内及び脊髄腔内に多発性の extra-medullary mass を形成。腫瘍の一部を摘出したが組織学的には前回と同様所見であり、下垂体腺腫の広汎な髄腔内播種と診断された。全経過11カ月で死亡。

### 34) 汎下垂体機能低下症と高プロラクチン血症を示した intrasellar meningioma の一例

渡辺 正人・谷口 禎規 (長岡赤十字病院 脳神経外科)  
 外山 孚・渡辺 正雄 (同 脳神経外科)  
 金子 兼三 (同 内科)  
 横山 元晴 (燕労災病院 脳神経外科)

症例は49才、女性。S59年7月頃から左耳側半盲、左視力低下さらに右耳側半盲も加わり来院。視力は右0.6、左0.1で、左不完全耳側半盲と右上耳側1/4盲を呈したが、他に神経学的異常を認めなかった。トルコ鞍は著明に拡大し、鞍内から鞍上部に造影剤で不均一に増強される腫瘍が認められたが、脳血管撮影では腫瘍陰影はみられなかった。内分泌学的検索では、顕著な汎下垂体前葉機能低下症と高プロラクチン血症を呈した。下垂体腺腫

を疑い、S60年8月6日経蝶形骨洞的に手術を行ったところ、病理診断は髄膜腫であった。

トルコ鞍内から発育したと思われる髄膜腫の一例につき若干の考察を加え報告する。

### 35) Giant prolactinoma 4例の検討

布村 充・宮町 敬吉 (北海道大学 脳神経外科)  
 杉本 信志・会田 敏光 (同 脳神経外科)  
 阿部 弘 (勤医協札幌中央 病院脳神経外科)  
 伊古田俊夫 (同 脳神経外科)

著明な鞍外進展を伴う Giant pituitary adenoma は根治的切除が困難であり、予後不良のものが多いことはよく知られている。今回私どもは直径50mm以上の Giant prolactinoma 4例を経験したので報告する。症例は18~36歳の男性2例、女性2例で、術前 PRL 値は12,000~42,500ng/ml であり全例に手術を施行した。手術 approach として経蝶形骨洞法は安全性において優れていたが、何れも部分摘出に終わった。CB-154の腫瘍縮小効果は4例中2例に認められ、中でも術前に投与した1例は著効を示し、CB-154の術前投与の有効性を示唆した。CB-154の1~2週間の術前投与にて効果を判定する Giant prolactinoma の治療 protocol を提唱した。

### 36) Pituitary macroadenoma 73例の検討

大坊 雅彦・丹羽 潤 (札幌医科大学 脳神経外科)  
 堀田晴比古・坂本 靖男 (同 脳神経外科)  
 太田 潔・田辺 純嘉 (同 脳神経外科)  
 端 和夫 (同 脳神経外科)

目的：macroadenoma 73例の治療成績を分析し、適切な治療方針を考察する。

対象：機能性腺腫53例、非機能性腺腫20例。男性24例、女性49例。腺腫の大きさは Hardy のII型が41例、III型11例、IV型21例。治療は経鼻的手術55例、開頭術13例、両者合併手術4例で1例はプロモクリプチン服用中である。

結果：視力視野異常を36例に認め、手術により改善したものの28例、不変6例、悪化2例。開頭術群で改善が悪かった。術後合併症は23例に認め、一過性尿崩症11例、次いで髄液漏6例であった。開頭術を行なった症例に脳神経麻痺、頭蓋内出血を認めた。経鼻的手術で行なった fibrous adenoma 2例のうち1例は部分摘出に留まり、1例はSAHを来した。